

「きもの」文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発

－「きもの」の着装を含む体験学習と海外への発信－

The development of education program

for the cultural folklore and for the transmission of “Kimono” culture

- Learning experience of how to wear a “Kimono” and transmission to foreign countries-

薩本 弥生<sup>\*1+</sup>, 川端 博子<sup>\*2+</sup>, 堀内 かおる<sup>\*1+</sup>, 扇澤 美千子<sup>\*3+</sup>, 斉藤 秀子<sup>\*4+</sup>, 呑山 委佐子<sup>\*5+</sup>  
Yayoi Satsumoto<sup>\*1+</sup>, Hiroko Kawabata<sup>\*2+</sup>, Kaoru Horiuchi<sup>\*1+</sup>, Michiko Ougizawa<sup>\*3+</sup>, Hideko Saito<sup>\*4+</sup>  
and Isako Nomiya<sup>\*5+</sup>

\*1 横浜国立大学教育人間科学部 神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台79-2  
Faculty of Education and Human Sciences, Yokohama National University79-2,  
Tokiwadai, Hodogaya, Yokohama 240-8501, Japan

\*2 埼玉大学教育学部

Faculty of education, Saitama University

\*3 茨城キリスト教大学生生活科学部

College of Life Sciences, Ibaraki Christian University

\*4 山梨県立大学人間福祉学部

Faculty of Human and Social Services, Yamanashi Prefectural University

\*5 大妻女子大学短期大学部

Junior college division, Otsuma Women's University

+ 服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化女子大学  
Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture,  
Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

**Abstract** : As the “Kimono” culture of Japan is not enough understood among the young Japanese, it is necessary to consider how to transmit the “Kimono” culture to the young generation. Many foreigners are highly interested in Japanese culture. Therefore it is necessary to examine how to show and explain the traditional culture of Japan. With a diverse background concerning “Kimono” culture, the purpose of this research is to develop an educational program to teach a “Kimono” culture as a folklore and then to transmit the information to the world. We focused especially on “Yukata” and plan to develop an experiential type of education program including how to wear a “Yukata”. We started developing the class practice at some junior high schools and high schools in Japan. This year we also started developing digital teaching materials (how to wear and how to fold “Yukata” for men and women) in Chinese version. Try-on-Yukata workshop was held as a pilot educational program to transmit Kimono culture, one part of

---

\*1) satumoto@ynu.ac.jp

the traditional cultures of Japan, to China (Shanghai) with about 40 young Chinese people in September, 2010 in cooperation with the Japanese consulate. At the beginning, we had a lecture about the Kimono culture with a local interpreter. The participants tried, with our help, to put on Yukata after watching a DVD showing how to put them on. We carried out a survey about (1) interest in modern and traditional Japanese culture before the workshop, (2) evaluation of DVD after watching, and (3) the feeling of wearing Yukata after the workshop. We also conducted Try-on-Yukata workshop as a pilot educational program to transmit Kimono culture to UK (Burton on Trent) with about 20 junior school students and 35 high school students at Blessed Robert Sutton School in October, 2010 with the co-researcher Mr. Zanker (PGCE/MSc Design and Technology Subject Leader of the Loughborough University in Britain) and Mrs. Stephens who is a teacher of that school. We carried out a similar survey for students in UK, too.

## はじめに

現代は核家族化の定着、便利な機器の普及、家事の外部化によって、生活技術を伝承する機会が減少している。国際化・情報化の進展によってモノの入手が用意になる中で私たちの価値観も変化し、古き良きモノや自国の伝統・文化への関心は低くなっているようである。被服に目を向けると、日本の「きもの」文化は、これまで日常着として、あるいは“はれ”の場の衣服として日本の生活や自然と関わりながら、「きもの」の染色、織、縫製、着装に関わる技術に支えられ形成されてきたが、日常着が洋装化し既製服が普及した今日、これらの技術や文化が一般に理解されなくなりつつある。

このような背景の元、2006年の教育基本法の改正を受け、2008年3月の学習指導要領告示では、国際社会で活躍する日本人の育成のため、我が国の郷土の伝統や文化を受け止め、それを継承、発展させるための伝統や文化に関する教育の充実を図ることが求められている。そして、中学校の技術・家庭科の衣生活分野では「和服の基本的な着装を扱うこともできること」が盛り込まれ、日本の伝統文化である和服について着装も含めて理解するための教育、すなわち「きもの」文化に関する教育方法についての検討、新しい教育デザインが必要となってきた。また、政府の施策の元、全国規模で外国人観光客が増加傾向にあり、情報のみならず、人やモノの移動を含むグローバル化が進んでいる。外国人の日本文化への関心は高く、日本の文化を世界に発信する機会が増え、文化の相互交流はさらに進むと考えられる。しかし、日本の伝統文化をどのように伝えていくか、その方法についての検討もこれからといえる。

このような「きもの」文化をめぐる様々な状況を背景に、本研究の目的は、「きもの」文化を伝承するための、そして、世界へ発信するための教育プログラムを開発することである。具体的には生徒を対象として「きもの」の内でも最も身近な浴衣を取り上げ、その着装を学び、「きもの」文化を体験し、さらに「テーマ学習」を通して「きもの」文化に対する理解を深める体験型教育プログラムを開発する。教材はデジタル版も作成し、インターネットでの教育サービスの提供を試みる。さらに、国内での実践を基礎として、同様に浴衣を題材に「きもの」文化を海外に発信するための、中国語版、英語版のデジタル教材を作成し、その利用を含めた教育プログラムを開発する。海外へもインターネットでの教育サービスの提供を試みる。

誰もが、伝統をふまえた衣生活を実現できる、国際交流にあたっては伝統服飾文化としての「きもの」文化を紹介できる教育プログラムの開発は、新学習指導要領の意図を汲むものであり、若年層の、日本の「きもの」文化を尊重し継承・発展させようとする心を育て、国際交流にも寄与できることが期待される。

## 研究内容と進捗状況

本研究の「浴衣の着装を含む体験的学習を通して、日本の「きもの」文化を次世代に伝承すること、および海外発信することを意図して、教育プログラムの開発と授業支援を行うこと」という目的のために、平成22年度は、以下の内容に着手した。各々の研究内容と進捗状況について、以下に概要を述べる。

### 1) 浴衣を題材とした日本での研究授業の実践

平成21年度に浴衣を題材とした授業研究の一環で行った横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校において実施した授業実践およびその中で実施したアンケート調査の結果および感想、今後の課題についての研究成果を平成22年7月に日本家庭科教育学会第53回大会において「浴衣の着装を題材とした中学校技術・家庭科での授業実践」としてポスター発表した。

また、平成21年度の授業実践の内容を踏まえ、家庭科教育関係学部にも所属する分担者（川端、堀内）が指導案のマスタープランを作成した。5つの協力校（千葉県立流山南高等学校、私立吉祥女子高等学校、私立洗足学園中学校、横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校、川崎市立金程中学校）の授業担当者が各校の生徒の実態に合わせた指導案を作成し、授業を実施したが、その際に教材・資料の提供と授業補佐などの協力を行った。

平成21年度の実践を通して日本の伝統文化の伝承のための、浴衣の着装による授業の効果が見られたものの、限られた授業時間の中で効率よく着付けの技術を習得させるには、さらなる工夫が必要であることが明らかとなった。そこで、被服構成学・被服教育を専門とする分担者（川端）が関わる協力校の授業実践では、難易度の高い帯結び練習の時間を設けてから着装実習を行った。また、授業時間の多くが着装に費やされ、着装についての振り返りや、互いに浴衣姿を見合ったりする時間が充分取れなかった点については、ペア学習の手法を取り入れ着装のできばえを相互評価をすること、振り返りのために写真撮影をして着装状態を自己評価することなどの工夫を行った。さらに、授業の前後に行ったアンケート調査を分析し、実践的・体験的な活動を通じて浴衣の着装がより効率よくできるようになったか、着ることを通じて衣服と社会生活との関わりや服飾文化に対する生徒の関心の喚起に寄与したか、教師の意図が生徒の学びとして成果を上げているかなどを検証している。研究成果は（社）日本家政学会第63回大会で平成23年6月に発表予定である。

平成23年3月にまとめの会を開催し、授業実践を行った協力校の教員とプロジェクトメンバー他、関係者が集まり、実践内容および解析結果を共有し、今後に向けた課題に関して意見を交わす予定である。

### 2) 浴衣を題材とした「きもの」文化についての教員研修の実施

家庭科教育関係学部にも所属するプロジェクトメンバー（薩本・川端）が、本教育プログラムを題材とした教員研修を免許更新講習と認定講習の中で実施し、家庭科の授業導入への参考として紹介した。講習時にアンケートを行っており、今後解析を検討している。また、授業の実施を希望する教員には、教育内容と資料提供面から支援していく予定である。

### 3) 中国でのワークショップ実践用教材としての浴衣の着装・たたみ方の中国語翻訳版 DVD 作成

平成21年度の本研究の実践が広く紹介され、中国での浴衣着装ワークショップの実践が打診されたため、平成22年度には「中国での浴衣の着装ワークショップ実践を通して日本理解と文化交流の促進に貢献する」という目的の達成のために、ワークショップ実施に先立ち作成した日本語版 DVD の中国語版作成を試みた。和裁を専門とし着装を含めて長期にわたり教育・研究を行ってきた分担者（呑山）の監修の元、以下の手順で行った。中国語を専門とする王氏、水原氏に翻訳ナレーションを委託し、平成22年7

月に、大妻女子大学のビデオ収録スタジオにおいて中国語版ナレーションの吹きこみを行い、8月に編集を行い、男女浴衣の着装・たたみ方の中国版 DVD を完成させた。

#### 4) 海外への「きもの」文化発信のための教育プログラム開発のための浴衣着装ワークショップ

##### 4)-1 中国上海での浴衣着装ワークショップ

平成 22 年 9 月 24 日(金)に日本文化サロン「人文雅集－益田屋」(上海)にて、中国人、在中日本人の参加者約 40 人を前に「浴衣着装ワークショップ in 上海」を開催した (Fig.1 参照)。

冒頭、「きもの」文化に造詣が深い分担者(呑山)が「人文雅集－益田屋」代表・邵陽氏の通訳を交えて、きもの歴史と文化に関する講演を行った。その後、男女別に中国語版の DVD を上映し、浴衣の着方を学んでもらい、プロジェクトメンバーと TA の学生による着つけの補助の元、参加者が浴衣を実際に着装した。浴衣着装のワークショップに先立ち、①日本の現代・伝統文化に関するアンケートを行い、ワークショップ後に②開発した中国語版浴衣の着装・たたみ方ビデオの評価、着装後に、④着装感アンケートを実施した。なお、上海での着装ワークショップの様子は、以下の横浜国立大学および大妻女子大学のホームページに紹介されている。

<http://www.ynu.ac.jp/hus/edu/1085/detail.html> (横浜国立大学)

<http://www.gakuin.otsuma.ac.jp/university/news/2010/2010-1004-1641-4.html> (大妻女子大学)

また、研究成果は(社)日本家政学会第 63 回大会で平成 23 年 6 月に学会発表予定である。

##### 4)-2 イギリス Burton on Trent での中学生対象の浴衣着装ワークショップ

平成 21 年 10 月にイギリスのラフバラにて日本人会とラフバラ大学の共同研究者 Zanker 氏 (Design & Technology Department) の協力により、現地の大学生および社会人対象に実施した浴衣着装のワークショップの研究成果を平成 22 年 10 月に衣服学会第 62 回年次大会において『「きもの」文化の海外発信をめざしたイギリスでの浴衣着装ワークショップ』として口頭発表した。

平成 22 年度は「外国の中学校での浴衣の着装を含む体験的授業実践を通して日本理解と文化交流の促進に貢献する」という目標達成のために、ラフバラ大学浴衣の着装ワークショップに参加した Stephens 氏(当時、現職教員大学院修士課程在籍)を Zanker 氏から紹介いただき、協力校として Stephens 氏が所属するラフバラから自動車で 50 分位の所にある Burton on Trent の Blessed Robert Sutton School で中学生、高校生を対象に英語版着装 DVD を用いた浴衣着装ワークショップを行った。対象は 15 歳のクラス(35 名)と 11 歳のクラス(20 名)の 2 クラ



Fig.1 中国での浴衣ワークショップ



Fig.2 英国での浴衣着装ワークショップ

スである (Fig.2 参照)。男女別に英語版の DVD 上映で浴衣の着方について示し、プロジェクトメンバー (齊藤・薩本) が着付けを補助、生徒が浴衣を実際に着装した。浴衣着装のワークショップに先立ち、事前に①日本の現代・伝統文化に関するアンケートを行い、ワークショップ後に②開発した英語版浴衣の着装・たたみ方ビデオの評価、着装後に、④着装感アンケートを実施した。なお、イギリスの中学校での着装ワークショップの様子は、以下の横浜国立大学のホームページに紹介されている。

<http://www.ynu.ac.jp/hus/edu/1195/detail.html>

また、平成 22、23 年における英国での浴衣ワークショップの内容は衣服学会誌 Vol.54, No.2, 47-48 (2011) に海外リポート「英国での浴衣着装ワークショップ」として掲載される予定である。

### 5) 浴衣を題材とした「きもの」文化についての「テーマ学習」教材の作成

「きもの」文化に関する調べ学習用の教材を作成し、生徒・教師が学べるようなテキスト教材を作成することを目標に、平成 21 年度にプロのイラストレータに委託して男女別浴衣の着装イラストを作成し、文化服飾博物館に依頼して同館所蔵の浴衣について写真撮影を行い、浴衣生地産地の産地や工程に関する教材作成のための取材として浴衣の伝統的な染めの技法を学ぶため浜松の「注染」染め工場および八王子の「長板中形」染め工場の見学を行うなど、準備を進めてきた。平成 22 年度は、これらに加え、色、模様、染め方、歴史など、「テーマ学習」の内容を吟味し、受講年齢にあっているか、日本の伝統文化を伝えることができるか、実際の着装の仕方の図示の方法などを検討し、浴衣に焦点を絞った「テーマ学習」教材を作成した。担当は、「きもの」文化に造詣が深い分担者 (呑山・齊藤) とした。引用した図表・写真等はすべてオリジナルとした (Fig.3 参照)。



Fig.3 テキスト教材表紙

### 6) 浴衣を題材とした「きもの」文化についての教材のデジタル教材化

上記「テーマ学習」教材を e-learning 教材として活用するため前年度着手した「着方が分かる」「たたみ方が分かる」「産地が分かる」「縫い方が分かる」を切口としたホームページのさらなる充実を図った。具体的には前年度作成した DVD を元に「着方が分かる」「たたみ方が分かる」の部分を、視聴者が視聴したいページを選択できるようにすること、ビデオから抜粋した写真やイラストレーターに作成を依頼した静止画と同期させ、よりわかりやすく使い勝手が良いようにすること、日本語版、英語版に加え中国版も加えることを目標に再編成した。さらに平成 22 年度末に完成した 5) の「テーマ学習」教材を元に「産地が分かる」「縫い方が分かる」他、浴衣の色・柄、染め、構成、さらに応用編として平面構成の文化、着物の種類と TPO などを盛り込んでいく予定である。横浜国立大学教育人間科学部マルチメディア文化課程のスタッフに委託し、平成 22 年度中に e-learning 教材の充実を図る予定である。

なお、着装ビデオ他の e-learning 教材は以下のサイトに掲載している。

<http://kimono-bunka.ynu.ac.jp>



## まとめ

以上、平成22年度には、本研究の目的に沿って研究を実施し、着装DVDの中国語版の作成とe-Learningへの応用、日本における浴衣を題材とした研究授業、中国、イギリスにおける浴衣ワークショップや授業実践、「きもの」文化に関して生徒・教師が学べるようなテキスト教材の作成など、着実に成果を上げている。授業実践では、平成21年度の課題を踏まえ授業実践の方法に工夫を凝らし、日本の伝統文化の伝承のための、浴衣の着装を題材とした授業の効果がより見られたが、学校の生徒やカリキュラムの現状に合わせた内容のさらなる工夫も必要であることが確認された。

平成23年度においては、平成22年度の授業実践を分析・評価し、完成したテキスト教材を活用して授業実践前後に生徒・教師がさらに学べるようにし、実践的・体験的な活動を通じて浴衣の着付けがより効率よくできるようになったか、着ることを通して衣服と社会生活との関わりや服飾文化に対する生徒の関心の喚起に寄与したかなどを検証していく。この中で、きもの良さを内外にアピールできるよう、生徒の声を発信していく試みにも挑戦し、本研究を発展させたいと考えている。これと併行して、平成22年度に引き続き本教育プログラムを題材とした教員研修を行い、家庭科の授業導入への参考として紹介し、授業の実施を希望する教員には、教育内容と資料提供面から支援していく予定である。さらに、完成したテキスト教材を翻訳し、デジタル教材、e-Learning教育環境を利用し、海外の研究者と連携して海外での研究授業を行い、国内同様の授業実践と分析・評価を行い、日本での実践と比較検討する予定である。

今後、授業実践や授業前後のアンケートの解析結果をも元に、さらに発展させた教材開発、授業研究、海外への発信を予定している。また、国内外での学会発表等による研究内容の発信も積極的に進めたいと考えている。

なお、本研究の実践内容の一部は大修館書店 家庭科通信43号(2010.10) Vol.15 No.3に「『きもの』文化の伝承と海外発信をめざすプロジェクト研究をめぐって」として紹介された。

<http://www.taishukan.co.jp/kateika/tsushin/index.html>

## 謝辞

本研究を遂行するにあたり、下記の方々に支えていただいた。ここに紹介し、感謝の意を表したい。大妻女子大学総合情報メディア教育開発センター・山田光栄氏、同大学助手・興儀由香里氏、同大学学生・松田美波氏、翻訳家・増田久美子氏、横浜国立大学非常勤講師・角田麻里氏、同大学非常勤講師・王凌氏、同大学教育人間科学部マルチメディア文化課程・山本光氏、同大学非常勤講師・森隆一氏、同大学学生・竹内達哉氏ら、同大学学生・遠藤亮将氏、千葉県立衛生短期大学・井上裕光氏、埼玉大学学生・松井萌恵氏、千葉県立流山南高等学校家庭科・仲田郁子教諭、私立吉祥女子高等学校家庭科・樋浦陽子教諭・山根晶子教諭、私立洗足学園中学校家庭科・山口香教諭、横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校家庭科・中尾由美子教諭、同大学教育人間科学部附属横浜中学校家庭科・葛川幸恵教諭(当時)、川崎市立金程中学校家庭科・長谷川伸子教諭、文化学園服飾博物館学芸室室長・植木淑子氏、文化女子大学・水原寿里氏、浜松織物染色加工協同組合事務局長・曾布川之宏氏、二橋染工場専務・二橋教正氏、「人文雅集－益田屋」代表・邵陽氏、在上海日本国総領事館広報文化センター・徳増かおる様、Design & Technology Department・Nigel Zanker氏、ラフバラ町日本人会代表・篠沢久二子氏、浴衣着装ワークショップに参加して下さった皆様、Blessed Robert Sutton SchoolのStephens氏および浴衣着装ワークショップに参加して下さった生徒たち。